

子どもの本

研究会



【私の一冊】 『天、共に在り アフガニスタン三十年の闘い』

中村哲 著（NHK出版） 入部祥子



私はペシャワール会中村哲さんの『天、共に在り アフガニスタン三十年の闘い』を紹介したい。最初に「現地三十年の体験を通して言えることは、私たちが己の分限を知り、誠実である限り、天の恵みと人のまごころは信頼に足る」とある。

この本とは、中村哲さんが武装勢力の凶弾に倒れた時に、私達は無念の思いが強く、追悼でペシャワール会を支援されてきた加藤登紀子さんのチャリティーコンサートを開催したいと思った時に出会い、ペシャワール会に益金を寄付することができた。

中村医師とアフガニスタンを結んだのは昆虫と山好きで、まず1978年に遠征隊に参加し現地への愛着を抱き、キリスト教海外医療協力隊から現地赴任となり、医療団体としてのペシャワール会が発足した。当時ハンセン病診療を懇願され、傷による潰瘍、皮膚病、骨髄炎など防ぐためにサンダルを作ったことで、足の切断が減った。この頃私は熊本で先生の講演を聞き、感動と共に衝撃を受けた。

またアフガン内戦や複雑な政治動向下の食糧不足のため、多くの人が栄養失調で抵抗力がないうえ、大干ばつで汚水を飲み、腸管感染症の脱水症で落命する人も増えていた。その中で、中村哲氏は医療事業と共に清潔な飲料水の獲得のため村人と協力し深い井戸を次々掘り、後に緑の大地計画も立てた。「百の診療所より一本の用水路」と訴えて、灌漑設備の充実を進め、「マルワード用水路」に着工した。困難の中現場で指揮を取り、自ら重機を動かし、近代的な機械力や技術でなく、地元農民が作業し維持改修できるように、日本古来の福岡の山田堰に学び、蛇籠工と柳枝工で用水路護岸を強くしたことで、乾燥地は潤った緑の田畑に回復し、作物の現金収入を得られ、難民や傭兵も帰農する奇跡が起き、今や65万人以上の人が生活できている。

今年8月タリバンがアフガニスタン全土制圧後、医療事業を再開。その後農業、灌漑用水路事業も再開したが、現在は厳しい干ばつと経済封鎖が問題。農業収入で重機燃料や賃金を支払い、堰事業はタリバン側の応援も得てゆっくり進行中。「真の人類共通の文化遺産は、平和と相互扶助の精神である」。これから干ばつの厳冬の地の人々が食糧にありつき、餓死、凍死しないことを祈りたい。



（NPOオハイエくまもと理事長）

新年のご挨拶

特定非営利活動法人熊本子どもの本の研究会

理事長 横田 真

昨年(2021年)は、コロナ禍の下で明け、「コロナと共に」を模索した年でありました。4月から、新しいスタッフ・体制の下での運営となりましたが、2カ月に1回の会報発行はきちんと継続することができました。21年度から開始したZOOMを用いたオンラインでの会合は、研究会活動検討会を5回、児童書の古典を語り合う会を2回開催しました。実際に集まっていた講座活動も、緊急事態宣言の発令状況を見ながら、4月、7月、10月(2回)、11月、12月と計5回開催することができました。おはなしボランティア「びわの木」も11月から再開しました。

9月21日に本研究会の創立者であり前理事長であった母(横田幸子)が永眠いたしました。多くの方々に母の旅立を見送っていただくとともに、追悼のメッセージもいただき、感謝しております。皆様のご協力の下で母が作り上げてきた本研究会の活動の意義と価値を、改めて感じさせられました。

世界でオミクロン株の感染が急拡大している状況を見ますと、2022年も「コロナと共に」での活動とならざるを得ないでしょう。実際に集まっていた講座活動は、万全の感染防止対策の下、次年度も継続的に開催していきたいと思

います。また、研究会活動検討会は今後も引き続きオンラインで開催し、熊本在住以外の方々とつながる活動を広げていきます。

研究会事務所に併設されているびわの本文庫の活用についても、地域の方々との連携の下、検討していきます。びわの本文庫を利用する児童達と、好きな本やお薦めの本について語り合えるような場にできればと思います。

本年も宜しく御願い申し上げます。

報告

◆講座 生きる力を、いつ、どのように獲得するのか

- ・日時 11月17日(水) 10時〜12時
- ・場所 熊本県民交流館バレア会議室
- ・参加者 9人
- ・担当 堀畑真紀子
- ・課題本 『ゆきのよあけ』 いまむらあしこ

文、あべ弘士・絵 童心社

捕食される動物、野うさぎの子は弱者である。

その弱者が如何にして生き延びることができたのか? 「通過儀礼」「縁起・偶然」「子どもの時間」の三つの観点で読み解く。

①野うさぎの子は、幼児期に母親という「安全基地」を拠り所として行動範囲を広げ、直感力や行動力、自己の力への信頼感を培う。

②母親との別離によって野うさぎの子は、厳しい冬を生き抜くこと、狐とふくろうの襲来、二つの試練を課せられる。「死」への意識、直感力と行動力、援助者の存在によってこの試練を克服する。人生は「偶然」の重なりから成り立ち予測不可能である。これまでに培った力と援助者との偶然の出会いが相俟って、弱者の運命を覆す。

③試練を克服した野うさぎの子は、自己の力への信頼感を高め、配偶者を獲得する。

「子どもの時間」は能率性・効率性を求めない。失敗・挑戦を繰り返すことで、行動力や直感力、自己の力への信頼感を養う、所謂、人間の生き方の基礎を培う時間である。高度経済成長以降の「競争原理」浸透の中、社会で勝ち残れる能力や特性を備えていないと見捨てられるという不安、部分的に否定されただけで丸ごと

否定されパニックを起こす感受性が子ども達の内面に形成されていると、高垣忠一郎氏（臨床心理学者）は指摘する。（文責 堀畑真紀子）

【参加者の感想】



「この例会がなかったら、こんなに深い理解には至らなかった」が参加者に共通の感想▼作家と読者を結ぶ研究者の解説を聞いたのは幸せ▼本書を読み聞かせた時に、宮沢賢治を思い出した子がいた。「子ども」や「自然」を大切にす作家として共通点が多い▼作者がいかにか野生動物の生態を調べているかが文献との比較で紹介され、死と隣り合わせの野生動物の真の姿だからこそ伝わる「生死」が描かれている▼作者が繁殖相手を想定した描写を母ウサギと解釈する読者も多い。通過儀礼よりも前の発達段階にある10歳以下の子なら、母との再会と理解するほうが安心感を得られて良い。幼い子どもから大人まで幅広い年齢層が、それぞれの感じ方で味える作品。さまざまな解釈ができるのは名作の証である▼通過儀礼を考慮すると、5年生が教科書で出会うのは良いタイミング。今村さんは子ども時代に死を意識してすごした。現代の5年生の反応が知りたい▼お会いした時に、本書に今村さんが「いのちきらめいて こみあ

げるよろこび」とサインしてくれたのは、生きることに向き合う姿勢が伝わる▼生きるために大切なことの一つが自己肯定感であり、それが「子どもの時間」を過ごす間の「縁起」で育まれる。彼らの良き援助者でありたいと願う。

【紹介本】

『シートン動物誌12 ウサギの足跡学』

今泉吉晴監訳 紀伊国屋書店

『野うさぎのフルー』 リダ・フォシユ作、

いしいももこ訳編 童話館出版

（報告 安田晶子）

◆講座 昔話のおもしろさ〜くり返し

・日時 12月8日（水）10時〜12時

・会場 熊本市立図書館集会室

・参加者 7人

・進行担当 木村一恵

○昔話の紹介（朗読）

「かしこいモリー」『おはなしのろうそく1』

東京子ども図書館より）

「白雪ひめ」『子どもに語るグリムの昔話』こ

ぐま社より）

○くり返しについて（参考図書…『昔話の語

法』小澤俊夫著 福音館書店）



昔話は口伝えされてきたものであり、耳で聞かれてきた文芸であるから、文章（語り口）は単純明快でなければならない。その特徴の一つに「くり返し」がある。

◇同じ場面は同じ言葉で語られる



昔話は口で語られ耳で聞かれてきたので、同じ場面が出てきたとき同じ言葉で言われてはじめて、聞き手はさつきと同じ場面なのだということが理解できる。

◇3回のくり返しを好む



・必ずといっていいほど2回目がすこし短い。
・ストーリーのなかで3回目の語りの長さが最も長く、重要性からいえば最も重要。

子どもは同じ話が同じ言葉でくり返されることを求めている、きわめて正確に反復されることを要求する。これは子どもの心の安定した成長にとって非常に重要な意味を持っている。子どもは好奇心に満ちていて、知らないものに出くわすと、必ずいじってみるが、夜、いつものおとなの声でいつもの絵本やいつものお話を読んでもらうと、心に安らぎを覚える。子どもにとっては、知らないものと出会う喜びと、すでに知っているものとまた出会う喜びというのが、常に重要な喜びである。昔話は、ストーリー自

体としては人をはらはらどきどきさせる冒険物語、あるいはこわいものとの出会いの物語。そうした人を緊張させる要素と、人の心を安定させる、すでに知っているものとまた出会う喜び、その両方を昔話は聞き手に与えてくれている。

【参加者の感想】



3回のくり返しは、1、2回目が同じ内容とリズム、3回目で話が展開する。そこには「既知なるもの」の安心感と「未知なるもの」の緊張感をはらんでいることが理解出来た▼「白雪ひめ」での「王子と王女」「鏡と妃」「7人の小人」のように、対立するものや同類をひたくりにすると3つの題材であることがわかった▼くり返しに対する子どもの感じ方を改めて知った▼くり返しは昔話の語り口の幹になる▼くり返しが昔話の記憶定着装置と納得しつつ、それならその展開の底に、より深遠な意味があるのではと思った▼3という数字はおもしろい。不思議、体や心のリズムと合っていると思った▼

西洋では三位一体など、3という数字の背景にはキリスト教がある▼昔話でよく使われる数字は1・2・3・7・12。

【持ち寄った本】



『みんなでよう！日本の昔話ききみみずきん』

関根榮一・文、藤川秀之・絵、チャイルド本社／『日本昔話百選』稲田浩二・稲田和子・編著
三省堂／『やまなしもぎ』平野直・再話、太田大八・画、福音館書店／『日本昔話事典』稲田浩二・等編、弘文堂／『日本昔話大成』第5巻(宝手拭、お銀小銀)関敬吾著、角川書店／『ババヤガーのしろいとり』(ロシア民話)内田莉紗子・再話、佐藤忠良・画、福音館書店／『ころころパンケーキ』(ノルウェー民話)スヴェン・オットー・絵、やまのうちきよこ・訳、偕成社

* *



講座は、2つの昔話を聞き、お話の世界に丸ごと浸ることから始めた。テーマのくり返しにとどまらず、昔話の「隣のじい型」「異類婚姻譚」のことや、ディズニーの作品における昔話についてなど話が広がっていった。昔話のおもしろさの秘密を皆で探っていく過程に興味がいふかと思つた。

(報告 木村一恵)

◆第5回研究会活動検討会

- 日時 12月12日 10時～11時40分
- 場所 オンライン会合(ZOOM)
- 参加者 3人

○地域での連携活動について



理事長(横田真) より最近のやりとりを紹介

・帯山西小学校の平野修校長訪問(11月29日9時)…図書室をご案内いただくとともに、地域の大人が小学校の図書活動に関与する可能性について意見交換。研究会事務所の校区の西原小学校・澤田伸一校長をご紹介いただいた。

・西原小学校澤田校長訪問(11月29日13時)…図書室をご案内いただくとともにびわの本文庫の活用可能性などについて意見交換。小学校を含めた地域内連携に熱心に取り組まれている日隈忍氏を紹介いただいた。

・西原校区自治協議会・日隈会長来訪(11月30日15時半～)…研究会事務所にお寄りいただき、びわの本文庫をご紹介。びわの本文庫を、地域の児童が放課後や休日に立ち寄って、本を読んだり、借りたりする場として活用する可能性について意見交換。

※以下意見交換



・小学校の図書室の読書相談などで地域の大人が連携できる可能性があるかもしれない。
・びわの本文庫を児童向けに開放するためには大人の常駐が必要。近隣の東海大学や県立大学の学生達と連携できると良いかもしれない。

・大学生にびわの本文庫に来てもらう場合には

近所の方々への周知などが必要。

○ふるさとくまもと応援寄附金（NPO等支援分）について

県担当者からふるさと納税のNPO等支援制度への登録勧誘があった。登録すると熊本県へのふるさと納税の際に支援先として指定してもらい、交付金を受けることができる。

・登録する方向で検討したい。

・登録時には研究会活動の年度計画を事前提出することが必要となる。

○こども食堂での活動について



会員の方が子ども食堂で絵本の紹介を2回ほど実施し、子ども達は喜んでいただくとのこと。

・機会があれば活動概要を紹介していただく。

○2022年度事業について会員より提案

①多田多恵子さん（NHK「趣味どきっ！道草さんぼ」講師）を招いて小講演会（定員約30人）の開催、②現在のペース（月1回程度）での講座（定例会）の開催、③横田幸子さんを偲ぶ会の開催（2022年9月頃）

・小講演会の開催を含め、会員からの提案に沿って2022年度の活動を計画していきたい。

（報告 横田真）

◆ボランティア活動だより



新型コロナウイルスの感染が広がり、何もかもが中止になっていた中、熊大教育学部付属特別支援学校では、リモート（学校内の別の場所から）でお話会を行っていた。こういうご時世だから私達も慣れなくちゃねと言いつつも、早く子ども達の前でしたいねという思いは強くなるばかりであった。



12月13日（月）9時半、今日もリモートお話会かと早目に行つて、どういう見せ方をするか立ち位置の確認などを行っていた。そんな中、中学部担当の先生が来られて「突然ですが、コロナも落ち着いてきているので対面でもいいですか」との提案。「もちろんです！」と私達。

子ども達（18人）が入ってきた。皆、ウキウキという感じ。ニコニコ顔。中学1年生の女の子が「お久しぶり！」と小走りで近寄ってくる。会ったのは初めてだよねと思っていたら、先生からリモートで会っていましたとの説明。そして「ついに来ました！お話会！」と始まるのあいさつをすると、拍手・拍手・拍手。そんな高揚した中で始まった。

今回のテーマは、「冬・年越し」。①ろうそくのうた②詩「かぜひいてゴジラ」富永佳与子

作③絵本『めんたべよう！』小西英子作（福音館書店）④漢字クイズ（自作カードを使つて）

今までの今年の漢字 ⑤絵本『パノラマ写真絵本トラの親子』（岩崎書店）⑥絵本『とらとほしがき』パク・ジェヒョン再話（光村教育図書）

⑦詩『ほいほいたいそう』工藤直子作⑧さよならあんころもち——のプログラム。「今日の午後に、今年の漢字が発表されますよ」と付け加えた。子ども達が集中しているのがビンビンと伝わってくる。「さよならあんころもち」が一番のお気に入りのA君の楽しそうな笑顔。私達も楽しいお話会だった。



・他の会場の様子

熊大教育学部付属支援学校の小学部・中学部はリモートでお話会を行ってきたが12月は対面で行われた。小学部で久しぶりに対面のお話会を行った担当者は「温かさが違う。参加型の絵本は、対面だからこそ楽しめる。『なぞなぞえほん』『100人のサンタクロース』終わった後、私達に抱きつきに来た子がいたと、報告があった。

熊本支援学校は11月17日（水）、一年半ぶりに対面でお話会を行うことができた。久しぶりなので小道具の「わたしのなまえは」のカード

を広げた時の驚きの反応は予想以上だった。リクエストに応じて、最後にもう一度広げてみせると「手品師になれば」と言われたとのこと。温かい思いに満たされる楽しいお話会だった。

県立図書館は、人数制限のお話会が10月から始まっている。消毒・マスク着用・ディスタンスを保つてという状況ではあるが、1組3人までの6組の参加者は、参加型の絵本やパネルシアターで声を出して反応してくれた。積極的に楽しんでいる様子があった。

市立図書館でのお話会はまだ始まっていない状況である。

(報告 倉岡寿雅子)

◆随想◆ 母との神話的時間



横田 恵美 (会員)

母・横田幸子が亡くなり3カ月が経った。言いたいのない寂しさに襲われることもあるが、いまは自分の生き方をまっとうしたことへの尊敬の念のほうが強い。母は2年前に玄関先で骨折して以来、老人ホームなどで暮らしていたが、最新の9日間は自宅に戻り本に囲まれたリビングで過ごした。兄(真、理事長)と私が枕元で思い出話をし、母の著書『地域活動の魅力』を仲

間と家族に支えられて』を音読した。ともに人生を振り返り、家族への惜しみない愛情と研究会への情熱を感じることができたいつときは、母がプレゼントしてくれた「神話的時間」だったように思う。コロナ禍をきっかけに付け始めた日記から抜粋してお伝えしたい。

9月13日(月)



午後1時過ぎ、母さんが家に帰ってきた。今のうちに感謝の気持ちを伝えたい一心で、母の娘で幸せだったことや、文庫活動の開拓者として尊敬していることなどを矢継ぎ早に話しかけた。ほとんど表情が変わらないので辛くなつて「私の名前を呼んで」と言うのと、「えみちゃん」と絞り出すように言ってくれた。胸が熱くなつた。

「真兄ちゃん週末の金曜日に帰ってくるよ。それでいい? 遅い?」と聞くと、かすれ声で「お・そ・い」。いかにも母らしい。

研究会の古上さんたちが水曜日に事務所に来る予定だと話し、「リビングにお通していいかしら」と聞くと、大きくうなずいた。やせ細り言葉もほとんど出なくなっているが、親しい方々に会っていただくことに迷いはない。

夕方、訪問看護師さんが来てくれてケアの仕

方を教えてもらうと、気持ちが落ち着いた。

9月14日(火)

午後『地域活動の魅力』を枕元で読み上げた。それまで天井をぼーっと見上げていたけれど、私のほうに顔を向けて聞き入っていた。「すごい行動力だね。娘として誇らしいよ」と言うのと、母の目から涙がこぼれた。

本のまえがきに「私は、常に地域にこだわって活動してきました。・・・その時々において必要だと思ふことをやっているうちに、『びわの木文庫』開設以来37年たっていました。『自分たちの地域は、自分たちの手で創っていく』という地域活動に魅力を感じて続けてきた」とある。草の根民主主義のお手本が身近にいたことに感動を覚えた。

9月15日(水)



午前中、木村さん、倉岡さん、古上さん、辻さんに会ってもらえた。表情は変わらなかったけれど、皆さんのことは分かったと思う。活動をともしたお仲間にあわせることができて本当によかった。

『地域活動の魅力』の編集を担当した熊本日日新聞社の編集委員が、本に寄せた一文のことで皆さんと大笑いした。このくだりだ。「企画(本

刊行)の打ち上げでお宅に呼ばれた時、仲間の皆さんの前で私は言った。『自分なら横田さんのスタッフとして一カ月はもたない。横田さんも偉いが、横田さんを支えるスタッフの皆さんもさらに偉い』。

母と一緒に走ってくださった方々に感謝の気持ちでいっぱい。子どもが熊本をはなれて40年、母には家族同様の存在だった。

午後、主治医のI先生が往診に來られた。兄が金曜夕方に帰る予定だと伝えると、「お兄さんにはあと1日くらい早く帰ってくるのを勧めます」と伝えてください」と言われた。

夕方、『地域活動の魅力』の続きを読んだ。父が亡くなったくだりにさしかかると、母の目から涙が出ていた。その顔が神々しい。昨日を最後に口は動くけれど、声が出なくなってきた。もう一度、母さんの声を聞きたい。

9月16日(木)



兄が予定を繰り上げて帰って來た。食事事も母のベッドの横のテーブルですることにした。父が亡くなる前、母がしていたように。

夜、咳が出て熱も上がってきた。兄が帰ってきてくれてよかった。一人だと不安に押しつぶされそうになっただろう。

9月17日(金)

容態が悪化している。血中酸素濃度が下がることが増え、眠っていることが多くなった。目を開けているときは、「お母さん大好き」と

繰り返して話しかけている。子ども(孫)が熱を出すたびに「子どもの面倒を見に来て」と電話していたことがしきりに思い出された。「母さんも研究会でクタクタだったのにごめんね」と何度何度も謝った。許してくれただろうか。

9月18日(土)



I先生が來られた。「ご本人は家に帰りがついていたので、今は満足感に浸っていると思います。お母さんとの時間を大切にしてください」と。訪問看護師の方々も毎日2回、献身的にケアしてくれる。心のこもった仕事ぶりにはいつも頭が下がる。

9月19日(日)



研究会の興津さんがお見舞いにいらした。それで思い切って村田先生(熊本高専名誉教授)にも電話をした。ずっと母のことを気にかけてくださり父のお墓参りにもよく連れていってくださった。村田先生にも会ってもらえてよかった。

9月20日(月)



夜、母の手を握っている話をしていたら、ぎゅっと握り返してきて30分ほど放そうとしなかった。こんな強い力がまだ残っていたのか。

9月21日(火)

朝から熱が上がり、血圧や酸素濃度が機械では計れない状態になった。「早ければ今日にも」と言われたが、特段苦しそうには見えない。ただ、呼吸の音はだんだん小さくなっている。

午後5時すぎ、容態が急変した。兄と2人で「母さんの子どもで幸せだったよ」「充実した人生だったね」と繰り返して声をかけるなか、静かに旅立っていった。苦しそうな表情はまったくなかった。穏やかな1日だった。

看護師のNさんが体を清め洗髪をして、薄化粧もしてくれた。とても美しい。死装束はブルーに銀糸の模様が入ったパーテイドレスを着せ、私がプレゼントした貝型のイヤリングもつけた。ドレスは、亡き兄・淳のシンガポールみやげの布であつた。母のお気に入りだった。



通夜・葬儀でたくさんの方々から「横田さんとの出会いによって思いがけず人生が豊かになった」と声をかけていただいた。多くの方々の記憶に残ることを母は喜んでいだろう。

1月～3月の講座・会合の案内

○語りと絵本の持ち寄りパーティー

・日時 1月19日(水) 10時～12時



・会場 熊本市立図書館集会所

「春」をテーマにお話、絵本、小道具：持ち

寄って楽しみましょう。

○お話の小道具の製作 カップから飛び出す人

形くらべうたで遊ぼう！

・日時 2月16日(水) 10時～12時 製作、

13時～15時 実演

・会場 熊本市立図書館集会所

・材料費 300円程度

○2021年度 閉講講座

・日時 3月16日(水) 10時～12時

・会場 熊本市立図書館集会所

「おはなし会」を楽しみ、21年度の活動を振り返ります。



★参加には事前申し込みが必要です。講座名、参加者の

お名前、連絡先を明記の上、メールかFAXでお申し込みください。社会状況により開催会場および日程が変更

または中止になる場合があります。お越しになる前に必ずホームページでご確認ください。

メール kouza(a)kodomonohon.org

FAX 096-382-5090



○第6回研究会活動検討会(オンライン)

・日時 2月13日(日) 10時～12時

研究会活動の企画や意見交換をします。参加

希望の方はメールで2月11日までにお申し込みください。

メール zoom(a)kodomonohon.org

(㊟を㊟に変えてアドレスにして下さい)

本はともだち！

蔵書数が多い中野区中央図書館を歩き回り、

中高生向け棚で見つけたのが『神々と戦士たち』

シリーズ(ミシェル・ペイヴァー著・中谷友紀

子訳、全5巻)でした。

3500年前のギリシャ、エゲ海、クレタ

島、エジプトを舞台にした、今なら中学生の年

齢の若者達の冒険物語です。当時の各地域の文明の発展状況、青銅器や火山活動が社会に与える影響、当時の人々の暮らしなどが背景としてきちんと書き込まれており、大人も楽しめる歴史ファンタジーとなっています。

羊飼いのヒュラスとコロノス一族のテラモンは子どもたちから一緒に遊ぶ大親友だったのですが、ミケーネ(ギリシャの一部)のコロノス一族の家宝である短剣に関する予言が原因と



なって、短剣を奪い合う敵同士となります。テ

ラモンに嫁ぐはずであったクレタ島の大巫女の

娘であるピアに加え、神々の使いと見なされる

イルカ、ライオン、ハヤブサがヒュラス達の仲間になることで、神話的な雰囲気醸し出しながら地中海をまたがった冒険物語が紡がれていきます。

物語の中に書き込まれている3人の心の動き

や、イルカのスピリット、雌ライオンのハボツ

ク、はやぶさのエコーの気持ちに関する記述は、

若い読者達に、自分の周りにいる人や動物の気持ち

を想像することの大切さを教えてくれるのではと思いました。

このシリーズの最終巻は2018年2月発行

で、比較的新しい本です。現代の作家も次々と

魅力的な物語を生み出してくれています。これらの本が小中学校の図書館の棚に並び、多くの児童が手にとるようになればと思います。

(横田 真)

■編集 金子・池田・上林・横田・イラスト 安田

特定非営利活動法人

熊本市子どもの本の研究会 発行

〒861-8029

熊本市東区 西原1丁目15の24

f a x 096 (382) 5090